

会 師 医 市 牧 小 苦

師 医

司 裕 富 重

逃避型うつ病について

エリートサラリーマンのSさんは、昨年の春ごろから急に体の不調を訴えるようになった。特にこれといった理由もない。ひどい落ち込みを自覚しているわけでもない。ただ、なんとなく仕事に集中できなくなり、次第に不眠、食欲の低下、全身の疲れ、胃腸の不快感などもでてきた。

朝起きると、出勤するのがお

つこうで、何かと理由をつけては欠勤してしまう。

しかし、それでいて全く何事もできなくなってしまうているわけでもない。会社以外では人と付き合うのに何の問題もなく、仕事以外の趣味ならば、意欲的に取り組むことだってできる。ただ、仕事のことを考えると、とたんに気力がなくなってしまうという。

小中学生から中年層へ拡大

聞いてみると、わがままとか思えないようなSさんの症状であるが、これらは二十代の若者にみられる「逃避型うつ病」の症状である。

逃避型うつ病は、以前からうつ病のひとつのタイプとして報告されていた。精神科医の広瀬氏は、この病気になりやすい人の性格傾向として過保護ないしは、物質的に豊かな環境で育ち、

大学卒業ころまで苦勞の経験がなく、プライドや対面にこだわるあまり、自分の能力を客観的に評価されるような場面や問題処理できないような場面から、簡単に逃避するということを指摘した。

この病気は、成育史や性格と強く結びついているだけに長引きやすく、治療も難しい。しかも、精神科の治療に携わってい

る者の印象としては、この種の病気とも不応とも名付けがたい症状で、外来を受診する患者さんは年々確実に増えてきている。年齢層も小中学生から中年層へと幅広くなりつつあるようだ。

人生のある時期に克服しておくべき課題を先送りし、それに後々直面せざるを得なくなってしまうたとき、人は危機的状況に陥る。しかし、生活、家族の在り方が複雑化するなかで、その課題とはなにかがとらえにくくなり、人生の途中で途方にくれる人はますます増えている。

